

1. 真の「米軍再編」は青森県から始まる

自衛隊と米軍との「一体化」を進める——。これを最大の目的としたのが、このたびの日本における「米軍再編」である。沖縄にいる海兵隊八〇〇〇人の削減や、普天間飛行場（沖縄県宜野湾市）の移設など、とかく沖縄ばかりに注目が集まっているが、今度の日本国内における再編は、実は青森県から始まる、ということにお気づきだろうか。

五月一日に発表された「在日米軍ロードマップ（行程表）」には、こんな記述がある。

「新たな米軍のXバンド・レーダー・システムの最適な展開地として航空自衛隊車力分屯基地が選定された。レーダーが運用可能となる（二〇〇六年夏までに、必要な措置や米側の資金負担による施設改修が行われる）

沖縄の海兵隊八〇〇〇人と、その家族九〇〇〇人がグアムに移転するための経費の半分以上（約六〇億ドル）までを日本側が負担するという中、青森県旧車力村（現・つがる市）にある航空自衛隊の車力分屯基地に、米側が自前で「Xバンド・レーダー・システム」なる正体不明のレーダーを設置するなどという。それも今年の夏までに、である。あと二

カ月ほどしかない。よほど急がないればならない特別な事情でもあるのだろう。

そこで調べてみると、この旧・車

力村は、一九九八年八月に北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）が飛ばした長距離弾道ミサイル「チボドン1号」の飛来コースのほぼ真下に位

置しており、北朝鮮が米国本土に向けミサイル発射した場合、その上を通じていくことになると予想される場所でもあることが判明する。

加えてロードマップによれば「米軍のパトリオットPAC-3（パックスリード）能力が日本における既存の米軍施設区域に展開され、可能な限り早い時期に運用可能となる」とある。PAC-3はパトリオット地対空ミサイルの最新型で、対ミサ

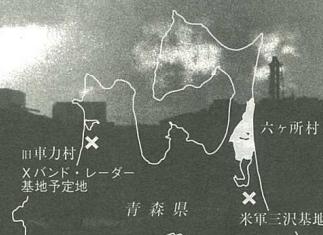
イル用型と言わている。

軍事評論家の前田哲男氏は語る。

「これを普通に読めば、車力に配備されるXバンド・レーダーを防衛するためのパトリオットミサイルが、既存の米軍三沢基地に配備されることになる。今、三沢基地は航空機よりも、ミサイル防衛がらみで活用されている。新しい動きが三沢周辺では事実です。どの新聞も書かな

六ヶ所炎上

核燃施設



ルポライター
明石昇二郎

事故シミュレーション >>> 3回集中連載

環境保護が叫ばれるこのご時世に、まるで当たり前のようにならぬ放射能を海や空に撒き散らしながら稼働する、時代錯誤の極みの大迷惑施設——。それが、青森県六ヶ所村の「使用済み核燃料再処理工場」だ。しかも、この工場で作られる《製品》は、テロの標的にもされかねないブルトニウム……。そんなところで大事故が起きたら、日本や世界はどうなるのか？ 六ヶ所再処理工場が抱える問題の本質を暴くべく、「想定外」の事故シミュレーションに挑んだ。

「北の要塞」に集結する

米軍の最高機密

いが、在日米軍基地に対する空ミサイルが来るのは初めてのこと。しかも、再編のロードマップの中でも三沢と車力が一番早い具体的な動きなんですね。なぜ「今年の夏まで」ですか。日本を守るために、こんなに急いでやるはずがない（笑）。アメリカ本土のミサイル防衛計画と密接に絡んだ動きだと見るのが自然でしょう

どうやらこのXバンド・レーダー、自衛隊・米軍「一体化」の象徴であり、シンボルであるとも言えそうだ。

このXバンド・レーダーの最大の役目は、高周波の電波を高出力で飛ばすこと、弾道ミサイルが撃ち出された「角度」を精密に割り出し、飛び立った瞬間にそれが米国本土に向かっているのが、グアムに向かっているのか、それとも在日米軍基地に向かっているのかを探知しよう、というものである。そもそも高周波は減衰率が激しく、あまり遠くまで飛ばない。しかしXバンド・レーダーが出す高周波は、五〇〇キロも六〇〇キロも飛んでいくのだといふ。つまり、飛びもしない高周波を高出力でそこまで飛ばしてしまう技術を米国は開発したわけだ。そして、正確で精密な迎撃を行なうのだといふ。

ただ、この「高出力」が周辺住民

にどの程度の影響を与えるのかは、全くわかっていない。半径五〇—一〇キロくらいのところでは、テレビやラジオに障害が出る恐れがあるといふ。また、空を飛ぶ飛行機の計器にも影響を与えるとされる。だが、米軍も防衛局も「被害は出ない」と影響はない」というだけで、詳細を一切語ろうとはしない。米国の最新兵器であり、一番の軍事機密でもあるXバンド・レーダーに関する詳細は、へたをすると防衛省でさえも米国から知られされていない可能性がある。

実を言うと、アメリカも一セットしか持っていない。それをわざわざ対北朝鮮のためだけに、日本に持つてこようとしている。そんな最新兵器の詳細を、わざわざ教えるわけがない。どのくらいの出力で、どこまで飛ばすということがわかれば、性能がわかつてしまうからです」

こう語るのは、Xバンド・レーダーに詳しい地元紙『東奥日報』編集委員の齊藤光政だ。

核燃料の真上を 音速で横切る 「侵入者」たち

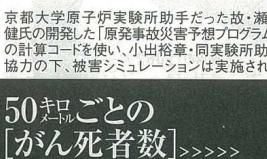
軍事的緊張が高まる真っ只中にあら、核施設。それが、六ヶ所村の再処理工場だ。日本人ならいざ知らず、世界の目から見れば再処理工場

「今回の米軍再編は、それこそ地球規模のもの。ドイツとかイタリアとかも朝鮮半島とか、必要のないところはどんどん手を抜かかれて、必要などころは強化している。再編＝軍縮と錯覚している日本人は多いが、ただ単にリストラするだけのこと。そして、強化されるのが日本です」すでにXバンド・レーダーは青森県内に運び込まれている模様だ。今年度中には、米軍嘉手納基地からF15戦闘機などの航空機訓練も三沢基地に移転してくるのだという。今回、の取材を通じ、地下聖堂（バンカ）を破壊するために開発されたあの「バンカーバスター」爆弾までが三沢市に運び込まれていることも確認された。「北の防衛の要」青森の緊張は高まる一方である。

そして、そんな三沢市の北隣にある同県六ヶ所村では、原爆の原料ともなるブルトニウムを製造する日本原燃の「使用済み核燃料再処理工場」が三月三二日よりアクティブ試験（試運転）を開始していた。すでに工場の排気筒や排水管からは、環境中の放射性物質の大量放出が始まっていた。



米軍三沢基地は、極東最大の情報収集基地である。小川原湖畔に立つ円形アンテナ「象の巻（おり）」の先に見える白い球状の物体は、地球規模の秘密通信情報傍受システム「エシュロン」にも関係しているとみられる巨大ドーム群だ



この解析方法については、
瀬尾氏の遺作「原発事故…その時、あなたは？」（風媒社）に詳しい
※第1期（このシミュレーションの設定条件等は次号で解説する）

2.
~~~~~  
そして、米軍は  
「MISAWA」から  
いなくなつた。：

「六ヶ所再処理工場で大事故が发生了。」  
第一報が総理官邸にもたらされたのは、発生から一〇分後の六月九日午後二時一〇分のことである。だが、それより数分早く米軍三沢基地には、墜落したF15エストライクイーグルの僚機から第一報が届いていた。

ますべく、ブルーを満たしていた水の一部は、爆発の轟音とともに瞬間に水蒸気となる。凄まじいばかりに多量の放射性物質を含んだその水中に、処理実工場の上空であつて、いう間に凝縮して「放射能雲」を形成する。そのいずれもが、人が無防備で近づけば即死してしまうほどの大粒の射線を放ち、あたりを汚染し続けていく。この汚染を食い止める手立てなど、どこにもなかった。

再処理工場方面から發せられた異様な「轟音」を耳にし、異変を察知した近隣住民の中には、暗闇の中で少しども再処理工場から離れるべく、被災地からの脱出を試みる者もいた。そこで肝心なのは、風向きを知ることだったので。

この時、現場周辺には北からの風が吹いていた。風速は毎秒四メートルと弱風。事故が生み出した「放射能雲」は、殺人レベルの放射線を放ちながら、時速一四キロメートルという自転車くらいの速度でゆっくりと南下していく。そしてその先には、事故を引き起こしたF15 Eストライクイーグルが飛び立つばかりの米軍三沢基地」があつた。

# 「地獄絵図」から 浮かび上がる 眞の立地理由

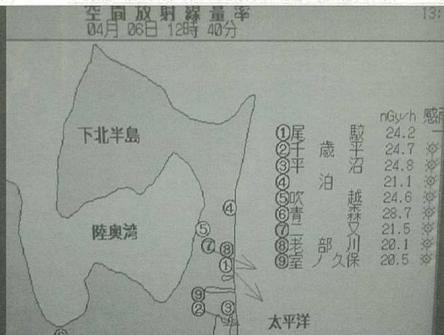
今回のシミュレーションでは、瀬尾氏のかつての同僚である小出裕章・同実験所助手の協力の下、「原発事故災害評価プログラム」に手を加え（欄外注参照）、再処理工場での

○%の確率、「六シーベルト」だと九〇%の確率で発生するとし、晩発性のガンの場合は、たくさん的人が受けた放射線の合計が「二・五シーベルトルト」になつた時、そのうちの一人

外注) 事故シミュレーションの設定条件 >>>>

今回このシミュレーションでは、使用済み燃料を取出燃焼度45GWd・tHMのPWR燃料、冷却期間5年として放射性核種の量を算出し、被曝評価上重要な44核種を選んだ。それぞれの核種について吸入攝取した場合の線量換算係数は日本原子力研究所(当時)が科学技術庁(当時)からの委託で作成したINDESコードを使って、成人に対する値を計算した。それぞれの核種が地表に沈着して引き起こす被曝線量と、一樣濃度の放射能雲に取り囲まれた時の地表での被曝線量については、新たに計算して直した。放射能の放出は2期にかけて考えた。まずは、事故によって直ちに放出が始まり、30分間に放出が終わるものを第1期とした。その後、使用済み燃料プールの水が抜け、冷却ができるなくなるに従い、半日ごとに燃料の10%ずつが溶融するとして、それを第2期とした。気象条件は大気安定度D型・雲の多いとうとう空模様、風速4m／秒。事故後1週間で住民は避難すると仮定した。また、放出高さは地上10mとし、放出が起きる面積は1000m<sup>2</sup>とした。第2期に関しては、放射能の放出が半日間続くとしたので、風向の変化を考慮して45度の範囲内に一様に拡散するとした。半日ごとに10%ずつが溶け、45度の範囲に拡散しながら4日間事故が継続するすれば全体の80%の燃料がこの間に溶けることになる。そして、その間、風・風が一樣にあちこちに吹くとすれば、360度全体が汚染を受けることになる。なお、人口データは2000年のものを使った。

再処理工場を見下ろす高台に建つ「六ヶ所原燃PRセンター」内にある「放射線監視モニター」。この数値が「1万ナノグレイ／hr」を超えると、地元の行政機関が住民の避難を検討し始めるのだといふ。



事故シミュレーション >>> 3回集中連載

「対テロ戦争」の使命を帯び、意気揚々と三沢基地を飛び立った米軍のF15Eストライクイーグルが突如制御不能に陥った。機体は「パンカーバスター」爆弾もろとも、六ヶ所村の核燃料再処理工場に墜落、そして炎上——。パニックが始まる頃、「殺人」放射能雲は、北の要塞「MISAWA」に向かっていた……。軍事的緊張が高まる真っ只中にある核施設・六ヶ所再処理工場を舞台に、「今そこにある危機」を徹底検証する「シミュレーション小説」の第2回



MISAWA AIR BASE  
三沢基地

# ルポライター 明石昇二郎

がガンで死亡する——とした。また、

事務部は時に風の吹いていた方向の、一度五度の開き角の内側でだけ、被害が発生する」との設定の下、計算を行なった。

れて、放射能の影響が及ぶ距離は短くなる。また、雨や雪が降った地域では、総て放射能まで降つてゐるため、汚染の度合がより一層強まる。

最大級の被害が発生するのは、事故発生時に北北東の風が吹いていた場合である。その風の行き着く先には、大人人口密度帯の東京があるからだ。避難せざるにとどまり続けた場合、死者数は先に挙げた数字をさらに上回ることになる。

再処理工場の事故では短半減期の放射能がなくなっているので、急性死者が生じるのは風がどちらの方向に吹いていようとは青森県内のみと

いう結果になつた。もし、再処理工場が人口密集地帯にあれば、急性死者数が跳ね上がるるのは言うまでもない。そしてのことこそが、過疎の村に再処理工場が建てられた「眞の理由」なのだろう。ちなみに、「再処理工場から約二四キロの地点にある米軍三沢基地の短期被曝量は、約一シーベルト」との結果になつてゐる。

しかも、被害はこれで終わらない。

高濃度の放射能に汚染された施設に誰も近づけず、冷却できなくなつた核燃料が溶け出し、放射能が漏れ続けるという二次被害が発生するから

雲<sup>カ</sup>が到達すれば、これすべてが汚染され、使い物にならなくなるのだ。一機あたり一三五億円超とも言われるF16。P-3Cに至っては、一機一〇〇億円以上なのだという。それを考へるだけでも、被害は天文学的な額に上ることが予想された。

六ヶ所村内の各所には、環境中にある放射線量を監視する「モニタリングボスト」が設置されている。そのいずれもが、次々と異常な値を記録し始めた。午後一時四三分、再処理工場から南に二キロほど離れた

同村の平沼地区にあるモニタリィングポストでは、毎時「一九ミリグレイ」（二九〇〇万ナノグレイ）という、通常當時（毎時三五ナノグレイ）の七〇倍もの値が検出される。“放射能雲”的到来を告げるものだつた。一時間あたり一九ミリシーベルトの被曝線量率となる。その上、「雲」が通り過ぎていつてしまつた後も地面が汚染されているため、その後は毎時一・六ミリシーベルトの被曝線量率となる。とはいゝ、この値を一目見ても、遠慮なく危険だと理解できるのである。恐らく、原子炉の専門家がその関係者らいのものだらう。誰のでもわかるよと言ひ換れば、この値は、一刻も早くこの場を立ち去らなければ數日のうちに死に至ることを意味していた。

しかし、だ。国の原子力安全委員会がつくった核施設における防災指針では、重点的に防災対策を講じる必要があるのは、原発の場合で半径一〇キロ圏内、再処理工場では半

問題は、三沢に取り残された総勢一万人以上にも及ぶ米国人たちだつ

だが、テレビの速報で再処理工場での事故発生を知らされた三沢市民はおよそ四万人には、何の「備え」も用意されていなかった。そんな三沢市の上空を雲が通過していくたのは、日付の変わった六月一日午前〇時一八分のことだった。

ことを受けて、グアムまで「再することになる。

こうして、米軍は「M-I-S-A」から去っていった。だが、米軍受けた被害の実態が明らかになると、実はこれからが本番だった。北東アジアに「軍事空地帯」きてしまふほどの決定的ダメー被つっていたのである。(一)

米軍全機、わずか30分で撤退完了

2時間後、  
放射能雲が  
三沢に到達……

て、実際にほんの数字以上のものが配備されていると想するのが正直だろう。戦術機を搭載でき、機関銃も搭載したとされる三沢のE-16に関しては「三個飛行隊（約16機）」が配備されている、との情報もある。

第2期の放出での  
Cs-137による汚染距離 >>>>>>>>>>



# 「国策」と 心中する青森県

米軍三沢基地の司令官は、何よりも「行政手腕」を求められるのだといふ。つまり、「いかに地元どうまくやるか」が問われる。だから、いくら六ヶ所再処理工場の存在がいろいろとも、政治的な発言など一切ない。沖縄とは違い、兵士たちの起こす事故や事件、トラブルも徹底的に取り締まる。

彼らの着任時の肩書きは「大佐」。それが、MISAWAの司令官になるやいなや、「准将」へと位が上がる。このことからもわかるように、三沢基地の「司令官」の座は典型的な出世コースなのだ。ここでうまくやれば、その先に待っているのは本国の国防総省か、太平洋司令部である。一方の三沢市は、基地との「共存共榮」を市のモットーに掲げている。米軍基地を抱える他の市町村で、このほど基地と友好的な自治体はない。が、こんな蜜月状態の日々も、「六ヶ所炎上」によって終止符が打たれることとなる。再処理工場の大事故により、三沢基地はもとより三沢市全体が高濃度の放射能汚染を受けてしまったからだ。

実は、これと似たような話が一九九一年のフィリピンでも起きている。同年六月に発生した「ビナップ火山噴火」の際、火山のそばにあったクラーク空軍基地が、降灰によつて壊滅的な被害を受けたのだ。この際に、米軍の戦闘機はいち早く同基地を脱出し、兵士やその家族ら約一万五〇〇〇人は、同国内にあるスパイクタク海軍基地に避難。そのままクラーク空軍基地に戻ることはなかつた。とはいえ、このケースはあくまでも大災が引き金であり、一〇〇%人災である今回の「六ヶ所炎上」とは大いに事情が異なる。

そもそも事故の発端は、三沢基地を飛び立つF15 Eストライクイーグルが制御不能に陥った末、再処理工場に墜落したことだつた。それは同時に、某国の「首魁暗殺」にも失敗したことを意味する（連載第1話参照）。

その上、米軍関係者のみ「核シェルター」に避難し、高レベルの被曝を免れていたことに対し、三沢市民の間から「名ばかりの『共存共榮』ではないか」との非難の声が上がつていた。とはいえ、三沢市民のための核シェルターが用意されない限り、三沢基地が核を被弾した場合にも同様のことが起りえた。（つまり、軍事基地とはそういうものであり、ましてや「共存共榮」など、片思いに

## 張り巡らせたエシユロンの網に ぱつきりと穴が……

米軍三沢基地は、極東最大の情報収集基地でもある。「象の檻」と称される巨大な円形アンテナ。そしてその脇に並ぶ白い球状の巨大ドーム群。これらは、地球規模の秘密通信情報傍聴システム「エシユロン」にも関係しているとされ、その一角は「ゼキュリティ・ビル」（保安の丘）と呼ばれる。関係者以外、誰も近づくことはできない。その情報収集能力は、あのCIA（米中央情報局）をしのぐとさえ言われる。

米軍が管理していた。だが、五年ほど前から米国最大の情報収集組織NSA（国家安全保障局）の直轄になったのだという。ここでは、短波から長波までのありとあらゆる信号に聞き耳を立てている。その主なターゲットは、中国や北朝鮮、シベリア

方面の通信だ。

「某国」が長距離弾道ミサイルを発射しようとしていたとする。すると、飛び交う信号の量が段階的に増加する。この「端緒」をいち早く掴むのがMISAWAの仕事だ。いよいよ怪しきぞ、ということになると、大型の偵察機WC-135やRC-135Sが某国上空付近を飛び始め、警戒態勢に入る。実際、一九九八年の「チボドン・ショック」の際には、MISAWAの「セキュリティ・ビル」は何と偵察衛星よりも早く「発射」の事実を掴んだのだ。

しかし、MISAWAが核汚染された今、この「端緒」を掴むことはもはや不可能となった。早い話システムを運用していた人々が皆、ヒルを忍んで避難、誰もいなくなってしまったのだ。この結果、日米両国間で叫ばれてきた「ミサイル防衛」における重要な「耳」のひとつが失われた。

それはかりではない。私たちが日常的に使っている携帯電話や電子メールでも無差別に傍聴しているとされる「エシユロン」も、同時に大打撃を被っていた。

三沢の象の檻は、エシユロン・システムのアジア地域におけるターミナルになくなっていた。ターミナルは世界に三あるが、米国以外には英

国（メンフィスビル）、日本（三沢）だけだ。アジアに関する情報はここ

で集積解析され、米国本土に送られ

る。さらにMISAWAのエシ

ロンには「ディクショナリー」（辞書）

と呼ばれるキーワード検索システム

もあった。無差別に傍聴した膨大な量の情報を、この検索システムでふるいにかけ、米国にとって必要な情報だけを取り出すためのものだ。だが「六ヶ所炎上」で三沢から人が去り、街全体が廃墟と化したことにより、これらの諜報活動を維持することができなくなった。

つまり、米国が世界に張り巡せていた自慢の情報網に「穴」が開いてしまったのである。放射能汚染は数十年から數万年単位の長期に及ぶため、この「大穴」を埋めるには、同じようなシステムをどこか別の場所に構築し直す必要があった。だが、システム運用開始以来、蓄積してきた貴重かつ膨大な情報データは、他の被害より、「セキュリティビル」が爆破して使用不能になつたことによる軍事的ダメージのほうがよほど大きい——と晒かれていた。戦闘機ばかりか、米軍の「耳」と「頭脳」まで、挙にくなり、東アジアに尖りだす「軍事空白地帯」が出現しつづけられ、「Xバンド・レーダー」その意味を一番わかつたのは、他ならぬ「某国」だろう。すぐ脇で耳をそばだてられ、話をすべて聞かれていた上に、「F16」という槍を突きつけられ、「Xバンド・レーダー」



## 事故シミュレーション

3回集中連載

再処理工場への戦闘機墜落事故で発生した「殺人レベル」の放射能雲が直撃し、米軍は極東最大の「耳」を有するMISAWAを手放さざるを得なかつた。唇を噛む米国大統領をよそに、放射能雲は国境をもやすやすと越え、汚染は着実に進行していく……。国策を妄信したツケとはい、あまりに大きな代償ではないか。青森の「わらはんど」に危機迫る中、「あづましい」青森のため今、何をすべきか——を考える「シミュレーション小説」の最終回。

ルポライター  
明石昇二郎



米軍のF15戦闘機（沖縄・米軍嘉手納基地）。（写真提供／時事）

上による放射能汚染は、その虎の子のXバンド・レーダーが配備され旧・東力村（現・つがる市）にまで及び、Xバンド・レーダーもまた被曝し、使い物にならなくなつてい

た。

MISAWAの代替策を考えるこ

とが、米軍の急務かつ最重要課題となつた。朝鮮半島と中国東北部への「出張基地」の代替は、当初、北海道の「航空自衛隊千歳基地」にすることが検討される。だが、放射能汚染の「第一波」が千歳にまで及んできたことを受け、すでにF16部隊はグアムにまで「転進」している。

さらに問題なのが、「情報の空白

をどうやって埋めるのか、というこ

